

初めて、コラムを執筆させていただく男子代表チームのテクニカルアドバイザーの田澤です。中山監督が大会で不在のため、今回は私が執筆させていただくことになりました。

私自身、イタリア在住のため中山監督とはメールが中心で代表チームを影ながら支えさせて頂いております。また、JDFFA との関わりも長らく技術委員長を務めさせて頂き、その頃から中山日本代表監督との親交はとても長いものです。

イタリアに住んでいると日本との生活環境の違いを痛感させられるのは当たり前なのですが、世界でももっとも恵まれた国である日本から見ると、日本での便利な生活からは得られないそれ以上に常に考えさせられる学ぶべきことが多くあります。特にサッカーにおいては長い歴史や文化が生活に根付いているので、彼らが持つ視点に触れることは、サッカーが持つアイデンティティの多様性をより身近に感じられます。特に育成段階においても日本の基本技術を中心に学ぶ指導方針とは大きく異なり、「戦術理解度」が求められています。これは、監督の戦術をただ単に忠実に実行するだけではありません。フィールドで戦っているのは選手なのですから、戦術を実行するその場に応じて、適切な判断をするスピードが重要となります。当然、フィールドでは何が起こるのか誰も想定できないのですから、当たり前のことと言えば当たり前なのですが、そうした戦術的な理解度、判断、実行のスピードが育成の段階から求められます。極端な話ですが、日本でも欧州よりかなりのテクニックに優れた選手はいくらでもいますが、テクニックに秀でた彼らが「起用」されるかどうかは別問題になる訳です。当然、基本がベースであることは言うまでもないのですが、基本を“基本技術”として単に捉えるではなく、基本の中に「戦術的」に理解し、判断し、実行することが、欧州では個としてもチームとしても「頭が良い」「優れた」選手として見なされ、彼らが起用されることが多くあります。逆にライバルにテクニックに優れた選手がいたとしても先ほど述べたような「能力」が足らなただけで、なかなか起用されず干されることも良く見られます。

また、イタリアでは、守備の文化があると言われていますが、こうした実情の一つにカバーリングにしてもフォローにしてもプレッシングにしても“ポジションの位置取り”を考えること、学ぶことを育成段階で実施しているため、誰もが当たり前にできるようになっているとされています。

では、どうすればこの「戦術理解度」を高められるのか？そんなことが日本にいてできるのか？となると何よりも大事になってくるのはやはり個人の“考える意識”です。普段のテレビや等のサッカー観戦において、ボールを持っているところを見るではなく、「なぜ、このポジションにいるのか」、「なぜ、ここでプレスをかけるのか」、「なぜ、ここで囲い込むのか」、「なぜ、そこで縦パスを受けるのか」、「なぜ、ゴールへ向かって斜めに走るのか」等のちょっとした動きに注目してみてください。そして、その上で戦術的なシステムはどうなっているのか見ながら考えてみてください。ボール動きだけに着目するのではなく、フィールド全体での動きを見ながら、この選手が先ほど述べたような「なぜ」そうなるのかを見て考えてみてください。

大事なものは偏りがちにならず、様々な試合を見ながらこうした考えることを意識しながら積み重ねていくうちに試合中でも頭の中にサッカーフィールドが広がって、もっと違った視点でサッカーの可能性を拓くことができ、より身近なことから手軽に学び考えることができます。